第二部

ふるさとへの想い

－市野々・下叶水－

ふるさとへの想い

家並みが消え草地になった集落跡を見下ろす。
子どもの遊ぶ声、働く姿、昔の賑わいが脳裏によみがえる。
市野々・下叶水が湖底に沈み、何百年と続いた歴史が断れる。
最後まで残ったイチョウも高台に移された。
この地に生まれ育った人々、ゆかりの者が共通して持つ記憶。
切れるような冷たい水で米を研ぎ、雪が消えたら山菜を採り、
寒くなったら漬物を漬け、里の恵みで暮らしていた私たちの
厳しくも温かな記憶。
―たとえ集落が沈んでも―
私たちの記憶が消え去ることはない。
子どもの頃のこと、嫁いできた日のこと、家の壁や庭の木々に感じる
この感覚を決して風化させたくない。
それは、近代化・都市化という波で失ってしまった日本の原風景であり
―心のふるさとである―
この地に伝わる歴史・伝承など貴重な文化とともに
私たちが生きた記憶を、未来に伝えることが私たちの使命である。

目次

第二部 ふるさとへの想い

―市野々・下叶水―

はじめに 市野々・下叶水の概要 40

人々のくらし

一 市野々・下叶水でのくらし 44
二 冠婚葬祭 46
三 くらしごよみ 50
四 住居 68
五 水とくらし 70
六 食べ物 73
七 女性のくらし 84
八 遊び 89

年中行事と祭り

一 村の年中行事 96
二 市野々の祭り 97
三 下叶水の祭り 99

産業

一 農業（米づくり） 100
二 市野々向原の開田 112
三 備荒と郷倉 114
四 養蚕業 117
五 木出し 120
六 炭焼き 123
七 その他の仕事 125

交通

一 越後街道 138
二 中津川街道と子持峠の道 143
三 仙野街道 146
四 鉄道 147

教育と文化

一 叶水学校の沿革 148
二 叶水学校（本校）のこと 150
三 市野々分校の日々 155
四 基督教独立学園と下叶水 160
五 社会教育 162
六 村医師 高橋忠琢 165
七 契約 166
八 物語「村の決め事」 169
九 言い伝え、民話 175

寺社と信仰

一 飛泉寺と子易地蔵尊 184
二 済広寺 190
三 法性院 192
四 市野々熊野神社 192
五 下叶水石動神社 193
六 村の神仏 194
七 庚甲講と講中参り 199
八 石碑 207

村の歴史

一 古代 210
二 中世 211
三 近世（上杉時代） 212
四 明治から昭和へ 213
五 村の自治組織 216

ふるさとへの想い

はじめに

市野々・下叶水の概要

下叶水の家並み（昭和４０年）

朝日連峰に源を発する荒川と飯豊（いいで）連峰から流れ出る玉川、横川の谷間（たにあい）を占める山間盆地に、古来小国郷と呼ばれた地方がある。

四境峨々たる山岳をめぐらすため他地方との交通は昔から困難で、米沢と越後を結ぶ越後街道は、俗に「十三峠」と呼ばれ、宇津峠や大里峠、黒沢峠、桜峠など大小十数ヶ所の峠越えが強いられていた。さらに中津川や村上方面へもけわしい峠道を越えねばならなかった。しかしながらこの小国郷を通る東西の交通路はかなり古い時代から開け、置賜（おきたま）と越後方面を結ぶ物資の輸送と文化の交流に、きわめて重要な役割を果たしてきたものと考えられる。

古代には、荒川から横川の谷間を縫い、けわしい山岳地帯を通り抜け、はるか大陸からツングース系の古志族の集団がこの小国郷に入ったともいわれるが、中世になって鎌倉期の戦乱を経て伊達（だて）氏や蒲生（がもう）氏の統治下に入ると、小国や玉川、市野々、白子沢など、交通の要衝は宿駅としての発展をみる。宿屋、牛馬宿、問屋などが発生し、牛方、背負子で繁盛をきわめるようになったが、これも雪の降らない半年の間だけで、十一月下旬からの積雪期の交通輸送は非常に困難で、厳冬にはほとんど途絶状態となった。

この地方は領主が伊達、蒲生、上杉と代わっても、厳しい自然環境のため、文化の恩恵に浴する機会も乏しく、生活は容易に改善されなかっ

飛泉寺跡の大銀杏（平成４年）

たが、英主上杉鷹山（ようざん）公の興産治国の大業によって小国郷の山間地もようやく潤いをみせるようになった。

鷹山公は政治の方針を「知らしむべし、而（しか）して行わしむべし」とし、その基本に民の父母たる信念と慈悲心を持たれたことは、小国の御役屋入り口に建てられた「在地人在安民」の碑文によってうかがい知ることができる。

米沢・置賜地方に上杉藩政が敷かれると街道整備は一挙に進み、人と物資の交流がいちだんと賑やかになり、市野々は近隣の白子沢や伊佐領、黒沢などとともに宿場の村として栄え、のちに津川村の中心地となる。

古くからの口碑伝承によれば、市野々が拓かれたのは保元年間（一一五六～一一五九）の頃で、平家の落武者が諸国を奔走したあと、見附山にしばらく潜伏し、やがて横川べりの美しい谷間を発見しそこを開拓したものという。時代が下って村落が形成されるようになるが、伊藤家は伊豆から、加藤家は加賀の国、高井家は越後の国高井村から移住し、村に定着するようになったといわれる。

また、特筆すべきは、この山間地に中世曹洞禅の飛泉寺が楠木正成公の直系といわれる傑堂能勝和尚によって開山されたことである。この信仰文化の移入が市野々の村の立場を確立させたことは疑いようもない。

市野々の地名であるが、江戸時代初めの慶長年間（一五九六～一六一五）の記録に、「一布」という記載が見られる。一説によれば平家の落武者を一布といったので、以後「いちのの」となったというが、これはあくまで伝承の域を出ない。

次に下叶水について述べてみよう。下叶水、上叶水、土尾、二渡戸などの小集落を合わせた叶水地区は、小国の中心部から子持峠や極楽峠の山坂を越え、大石沢川の谷間をさか

市野々の家並み（昭和46年）

市野々集落（平成３年）

下叶水集落（平成３年）

のぼって九才峠から中津川、米沢に至った中津川街道の沿道にある。

村落形成の起源については、平家の落人伝説などもあるがはっきりしない。江戸時代中頃には、すでに百人以上の人が住んでいたという記録がある。また、下叶水には、慶長年間に創建された曹洞宗済広寺があり、鎌倉時代の寄木造りとされる阿弥陀如来坐像を有する。

この地域は、拠点集落の上叶水で本流の横川（滝川）に南から大石沢川が合流し、豊かな水量をもつ河川に面しながらも、低水位のために水田用水に利用できず、周辺の山から沢水を引き込む苦難を強いられた。「叶水」の地名にはそうした村民の苦しい闘いの歴史が込められている。

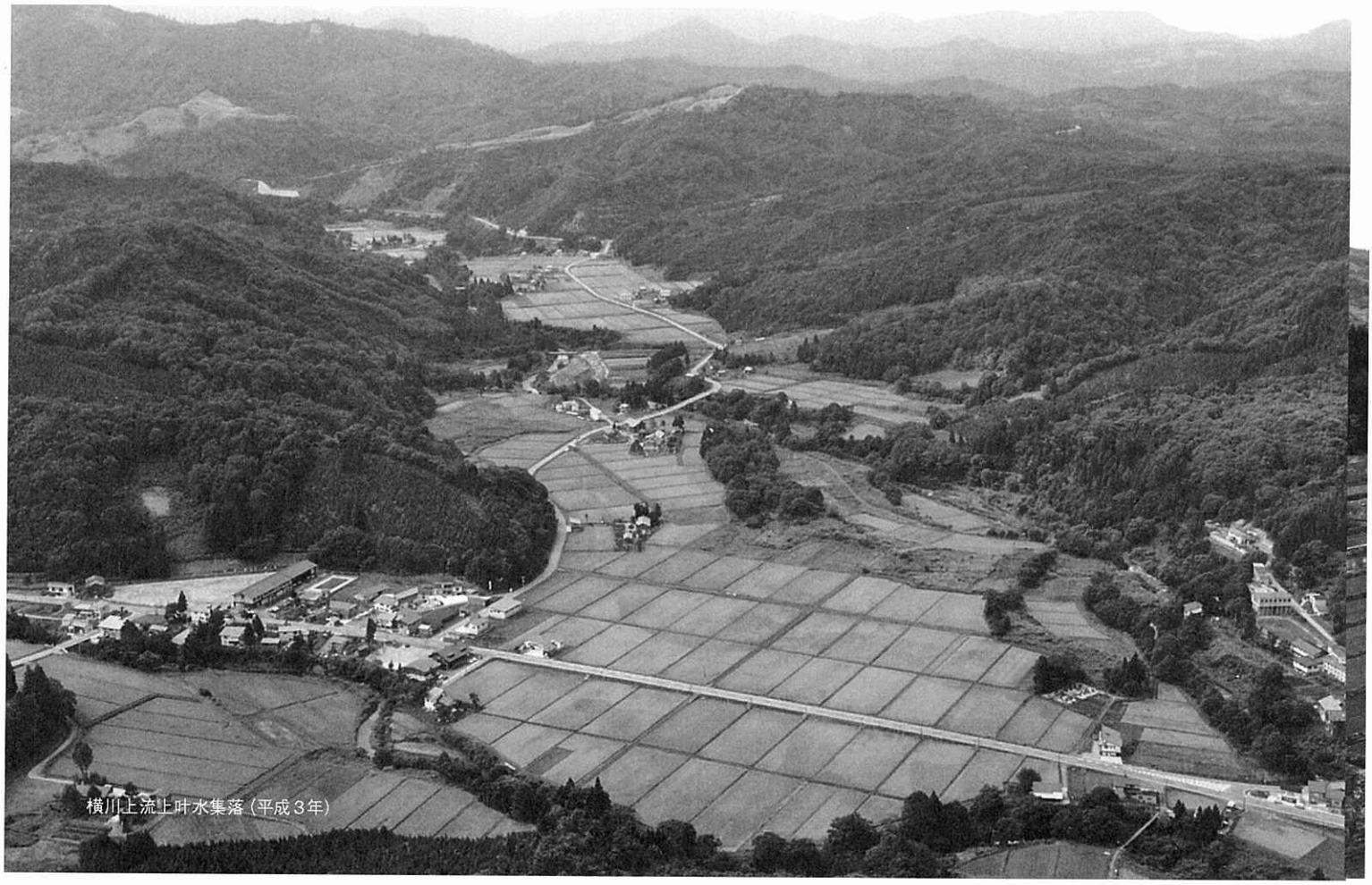
この市野々・下叶水の地域は、住み続けてきた人々によって千年をゆうに超える歴史を刻んできたが、横川ダムの建設によりまもなく水の底に沈もうとしている。何代、何十代にもわたって住み続けてきた家の人々にとっては無念の思いも強いであろう。

すでに移転も終わり、地域共同体としての存在はなくなってしまった。しかし、かつて、確かにくらしを続けていた人々がいたことを記録しておくことは、住民のためにも社会史的にも必要なことである。

本書は、みちのくの飯豊山系山間の川沿いに暮らしてきた人々のことをでき得るかぎり記録として残し、子々孫々まで伝えたいと想うものである。

夏の横川（ダム本体付近）

冬の横川


横川上流上叶水集落（平成３年）